『道中亀山噺』成立考

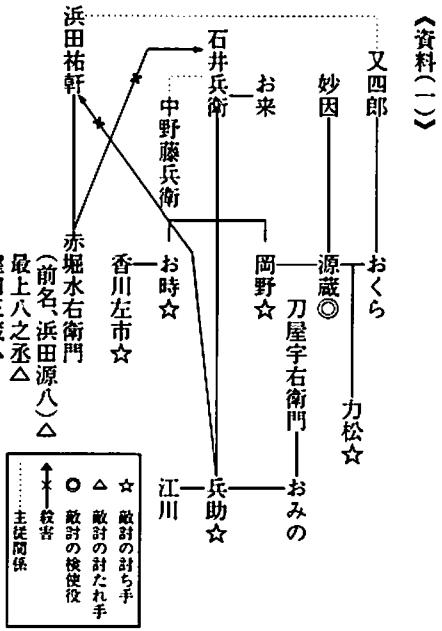
北川博子

安永七年七月十七日、大坂北西の芝居、竹田万治郎座初演の『道中亀山噺』は、近松半二最初の単独作である。この作品の成立に関しては、亀山敵討物の先行歌舞伎・浄瑠璃に続くものとして捉えられてきた。しかし、それだけでこの作品の成立を論じることは可能であろうか。本論では、今まで論述されることのなかった『道中亀山噺』の成立事情について考察を加えていきたいと思う。

一

まずは、『道中亀山噺』の内容を見ておくことにする。次に、主要人物関係図〈資料(一)〉と、作品の構成〈資料(二)〉をあげておく。

〈資料(一)〉



段		太夫	時	場所	あらすじ
第一　天龍川の段	口	是太夫	四月一五日	天龍川	お来がお時の恋の取りもちをしている舟遊び中に、水右衛門ら三人が酔いに任せて絡んでくる。お来は香箱を投げて、それを最初に手にした者にお酌をすると約束して、その場を逃れる。
	奥	咲太夫	四月一六日	浜松	兵衛は水右衛門が香箱の持ち主と不義をしたと自慢げに話すのを聞くが、その持ち主が妻お来であることに気付き憤慨する。
第二　日待の段	口	文字太夫	四月二八日	浜松	兵衛は日待に百物語を催し、お来と水右衛門を引き合わせる。二人は共に驚くが、その場は平静を取り繕う。
	中	政太夫			お来の計らいで密会できたお時と左市であったが、その密会を種にお来は水右衛門から欠け落ちを迫られ、承知して別れる。そこへ兵衛が現れ、不義をただすが、お来はお時に対する義理のため、不義者の汚名を進んで受けようと、奥へ引き立てられて行く。
	奥	男徳斎			不義のかどで討ったお来の首の前で、兵衛は水右衛門に不義密通と公金横領の罪を認めさせようとするが、逆に、水右衛門と仲間に討たれてしまう。
第三　亀山屋敷の段	口	是太夫	五月初旬	亀山	源蔵のもとに、兵衛の家来、藤兵衛がやって来て、敵討の助太刀を頼むが、源蔵に断られる。
	奥	咲太夫			源蔵は本心を明かさず、周囲から誤解をうけるが、公金横領の責任者故、敵討の許可が下りない兵衛のため、わざと御前試合に負け、敵水右衛門を捜す旅に出ることを明らかにする。

第四　刀屋の段	口	彦太夫	六月二五日
	奥	染太夫	大坂
第五　川井の段		中太夫	七月七日
第大		大井川	
第六　在所の段	口	文字太夫	七月中旬
	奥	政太夫	伊勢国浜田村
第七　追善の段	口	染太夫（注①）	七月二七日
	奥		亀山
第八　討の段		男徳斎（注②）	七月二八日
敵の			亀山城内

天神祭の中、吉兵衛（兵衛の勘当の子、兵助）は馴染みの遊女江川が身請けされたことを知る。

江川が現れ、吉兵衛に惚れているおみのと一騒動となる。一方、番頭嘉七は、自分の盗みの罪を吉兵衛に着せようとするが、金を持参して弟を迎えに来ていたお島（岡野）に罪をなすりつけ、その顔に焼鉄を当てる。姉弟は素性を明かし、おみのを吉兵衛の嫁に迎え、江川を身請けすることに決め、敵討に向かう。

藤兵衛は、大井川で水右衛門に追い付くが、逆に討たれてしまう。水右衛門は、所持していた書状から藤兵衛を兵助と思い込む。

水右衛門は、乳母の夫、又四郎の家の二階に世話になっている。

水右衛門を捜す源蔵は、我が子力松の成長を見るために立ち寄る。力松の剣術の師が、水右衛門と気付いた源蔵は、本心を隠したまま、おくら・力松の縁を切る。水右衛門から事情を聞いた又四郎は、義理の間で切腹する。又四郎の心情を汲んで源蔵は水右衛門を逃し、力松を後継ぎに決める。

兵衛追善の逮夜に、源蔵の家に石井家の人々が集まり、嫁取りの話を種に水右衛門をおびきだす計画を語る。

ところが、現れたのは祐軒であり、岡野・お時・関助（兵助）にさんざん嫌味を言う。帰途に、関助を兵助と見抜いていた祐軒は、兵助に切りかかるが、逆に殺されてしまう。

水右衛門の悪事が露見し、上意による敵討が認められ、源蔵が検使の役をする中、敵討が成就する。

この作品は、約三か月の事件を東海道に沿った場所で展開させている。第一、第二は親が殺害されるまでの経緯を、第三から第七までは残された子供たちや、それにまつわる人々の苦心談を、そして、第八は仇討ち本懐を遂げる姿を描いている。

実際の事件は、元禄十四年に敵討成就となっており、安永のこの頃にはすでに昔々の敵討なのであるが、近松半二はこれを安永の現代に移しかえた。それは第四「刀屋の段」に顕著に現れている。この段は、六月二十五日の天神祭が背景になっており、

是は桂の川水に浮名を流すうたかたの。アリヤしたよい（ニワカ狂言）〳〵。お半を背に長右衛門。アリヤシタよい〳〵。（注③）

と、安永頃に流行した俄で始まる。また、御迎人形の作者が、

お大名へ差上る人形。大坂名人の細工人。大江卯兵衛に早速誂へ置ました。（注④）

と、実名で出てくる。当時の天神祭には俄と御迎人形はつき物であったので、観客たちにとっては、つい一月前の天神祭の再現となり、現代の風物を充分に楽しむことのできる芝居だったわけである。

「道中亀山噺」には、二人の主人公がいる。石井兵衛の実子でありながら、一旦は勘当され、町人となりながらも、姉と妹の先に立って敵討を成し遂げる石井兵助と、舅の敵討を陰から支え、助太刀する石井源蔵である。《資料(二)》を見ると、第三から第七までの苦心談の部分を兵助と源蔵を中心として、交互に描いていることがわかる。

第四「刀屋の段」の兵助は勘当を受け、今は町人吉兵衛となり、刀屋で手代として働いている。馴染みの遊女江川と、主人の娘おみのの二人から慕われており、世話物の男主人公の典型と言うことができる。天神祭という、観客たちにとって記憶に新しい風物を背景に、二人の女性の間で揺れる男心と、敵討に向かう孝心とが描かれているのである。その兵助が第七「追善の段」では、敵役の祐軒に散々嫌がらせを受けながらも、第八「敵討の段」で見事に敵討を成し遂げる。

一方、石井源蔵という人物は、第三「亀山屋舗の段」のように、あくまでも本心を隠そうとし、第六「在所の段」でもその姿勢を保ちつつ、舅への義理故、一子力松との縁を切ろうとまでする。何事をも犠牲にしてまで、忠義を貫く人物は、時代物の伝統の中にあったものである。そして、この源蔵は、第八「敵討の段」で、検使役として、石井兄弟の敵討を見守る。

この二人を敵討の柱として、近松半二は、「道中亀山噺」を書いた。それでは、半二は、何を下敷きにこの作品を執筆した

のだろうか。

二

従来、この『道中亀山噺』は、亀山敵討物の先行歌舞伎や浄瑠璃を基にして成立したと捉えられてきた。果たして、それは正しいのであろうか。

元禄十四年に起こった敵討は、文芸の世界だけではなく、歴史、記録類にも数多くの記載を見る。そして、事件の翌十五年には、早速、浮世草子『元禄曽我物語』が出版され、また、同年、浄瑠璃『道中評判敵討』が上演されて、この二つは、実説をなぞったものとして広く世に知られるところとなる。以下、『道中亀山噺』に至るまでの先行作を演劇以外の文芸をも含めて次にまとめておく。

《資料(三)》

(上演)年月日		外題	座(出版元)	
元禄一五・正	浮	元禄曽我物語	〔京 江	河内屋五郎右衛門 升屋五郎右衛門〕刊
九?	浄	道中評判敵討	坂	竹本座
享保一三・七・二九	歌	勢州亀山仇討	坂	山本京四郎座
一七・二の替	歌	敵討亀山噺	坂	岩井半四郎座
元文 五・五・五	歌	敵討亀山通	坂	芳沢あやめ座
寛延 元・一〇	歌	敵討椿亀山	京	中村粂太郎座
この頃				
宝暦 二・夏	実	石井明道士		
七	歌	花鰹亀山通	江	市村羽左衛門座
〃・一〇・五	黒	亀山曽我念力岩	江	鱗形屋孫兵衛刊
明和 二・二・二・三	歌	亀山曽我五十年忌	京	染松松次郎座
七・四・一九	歌	初鎧源氏譜	坂	三桝大五郎座
	浄	往昔模様亀山染	江	肥前座
安永 二・正	浮	昔敵討実録	江 京	上坂市兵衛 前川六左衛門 西田屋理兵衛〕刊
〃	浄	往昔模様亀山染	江	(座不明)
五・九・九	歌	楓錦亀山通	江	市村羽左衛門座
九・七・一七	浄	道中亀山噺	坂	竹田万治郎座

浮…浮世草子、浄…浄瑠璃、歌…歌舞伎、実…実録、黒…黒本

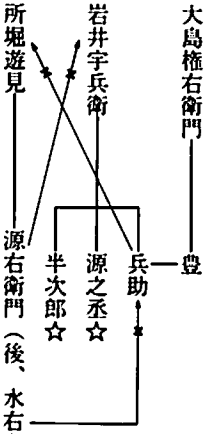
《資料(三)》をみると、亀山の敵討は歌舞伎にもたびたび取り入れられたことがわかるが、安永のこの頃では、むしろ実録

の『石井明道士』で有名であった。この実録の流布による影響であろうか。安永二年には『元禄曽我物語』の改題本『昔敵討実録』が出版されている。当時の実録の隆盛を考えても、半二は『石井明道士』を知っていたであろう。また、『昔敵討実録』が使用している百物語の趣向や『徒然草』百七十五段を、『道中亀山噺』の中で利用していることなどからも、半二が『昔敵討実録』を読んでいたことは明らかである。つまり、作者の近松半二も含めて安永頃の上方の人々は、芝居よりむしろ、実録や浮世草子で亀山の敵討を知っていたことになる。

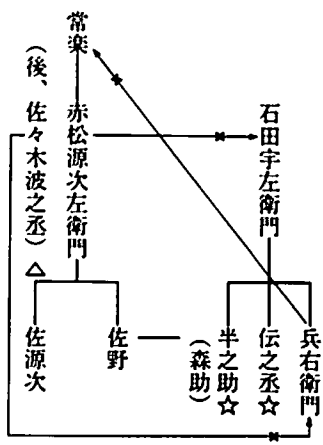
それらの亀山敵討の人物関係図《資料(四)》や特徴《資料(五)》を、丸本の現存する浄瑠璃『道中評判敵討』を含めて、次に整理しておく。

《資料(四)》

『元禄曽我物語』



『道中評判敵討』



『石井明道士』[注⑤]

《資料(五)》[注⑥]

①敵源右衛門は、槍に対する自分のおごりをたしなめられたことがきっかけとなって、師である宇兵衛を殺害した。

②兵助は、水右衛門をおびき出すために、何の罪もない遊見を殺し、相狙いとなる。
③兵助は、水右衛門に敵として殺され、幼い弟たちが成人して敵討を成就する。
④親が殺害されてから敵討成就までに三十年近い年月が流れている。

先行歌舞伎では、台帳・絵尽し等の現存が確認できないので、細部の内容は不明だが、確認できる番付を見ても、右と大きな差異はないと思われる。すると、安永頃に知られていた亀山の敵討と、前に見た『道中亀山噺』では内容に隔たりを持つことになる。

それでは、従来の亀山敵討物と『道中亀山噺』の相違を整理してみよう。

最初に、昔々の三十年に亙る敵討を三か月間の現代劇に仕立て直したことがあげられる。

次に、実録や浮世草子、浄瑠璃は善悪の対比が明確ではないが、『道中亀山噺』では、水右衛門と祐軒を完全な悪人にしている点である。先行作において、源右衛門を悪、石井兄弟を善と単純に割り切ることはできない。親の敵討とはいえ、何の罪もない善良な遊見を殺してしまう石井側にも非はあるし、三十年近い年月が流れた後、若気の至りを深く反省して、石井父子に回向し、自ら進んで討たれる源右衛門にも良心はある。善と悪とを明確に打ち出すこの頃の芝居では、実録や浮世草子をそのまま取り入れたのでは人形浄瑠璃として成立しない。しかし、善と悪との対比を明確にし、他にも芝居らしい要素を取り入れただけが『道中亀山噺』かというと、無論そうではない。

最後に、一番大きな相違であるが、人物設定が全く異なるのである。以前の亀山敵討物には、石井兄弟に姉妹は含まれない。あくまで「兄弟」の敵討である。しかし『道中亀山噺』では兵助の他、岡野・お時という人物も敵討の主体となっている。しかも、敵討の二本の柱の一人に源蔵という人物を設定している。これ以前の石井兄弟は、家来と共に苦労はするが、助太刀する人物は登場せず、自力で敵討を成し遂げている。先行諸作品と人物の設定に相違があるので、それにまつわる内容が異なってくる。このことは内容を比べてみても明らかである。

以上のように比較すると、『道中亀山噺』と、先行諸作品では、内容が異なっていることがわかる。従来の研究辞典類では、この作品を『道中評判敵討』の筋を複雑化したもの、或は、『元禄曽我物語』を浄瑠璃化したものと捉えてきたが、先行諸作品だけでは、この作品の成立を論ずることができないと思わ

れる。

三

「道中亀山噺」の成立を考えるには、先行諸作品だけでは不充分であることがわかった。それでは、一体この作品を書くに当たって、半二は何を基にしたのだろうか。

手掛かりとなるのは、先に述べたところの、先行作との大きな違いである人物設定である。『道中亀山噺』は、敵討の討ち手に、岡野・お時といった姉妹を加え、敵討を陰から支える人物に源蔵を置いた。この「姉妹の敵討」・「助太刀」から連想するもの、それは巌流島の世界であろう。元文二年に初演された歌舞伎『敵討巌流島』が、他の敵討物に与えた影響が大きいことはよく知られている。しかし、安永七年に、しかも、世界の異なる亀山敵討に何故「巌流島」なのか。

そこで『敵討巌流島』が初演された元文二年から安永七年までの巌流島の劇史を振り返ってみたい。

《資料(六)》

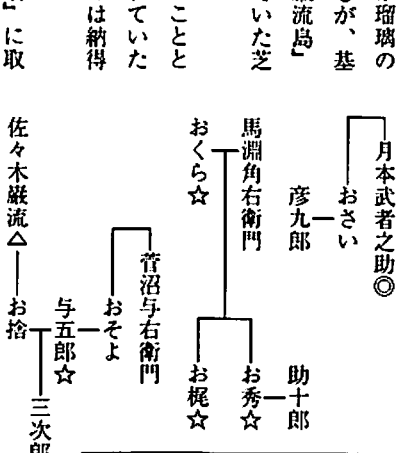
上演年月日	外題		座	
元文 二・夏	敵討巌流島	歌	芳沢あやめ座	京
〃・六・四	吉岡染姉妹	歌	中村富十郎座	京
〃・夏	岸流島	歌	水木竹之助座	京
三・秋	敵討巌流島	歌	市村羽左衛門座	江
四・三・二六	敵討巌流島	歌	水木辰之助座	京
寛保 元・二・一一	けいせい出口柳	歌	榊山重太郎座	京
三・五・二一	敵討巌流島	歌	坂田市太郎・花川市之丞座	京
延享 三・一一・一七	花筏巌流島	浄	豊竹座	坂
寛延 元・七・一五	敵討巌流島	歌	市村羽左衛門座	江
二	巌流島	歌	中村松兵衛座	京
宝暦 三・七	信田世嗣鑑	歌	中村勘三郎座	江
〃・〃・一五	敵討巌流島	歌	市村羽左衛門座	江
九	敵討巌流島	歌	辰上政吉座	京
一二	巌流島	歌	石井飛驒掾座	坂
明和 五・九・二二	巌流島	歌	尾上粂助・紋太郎座	京
七・四・八	敵討巌流島	歌	中山与三郎座	坂
安永 三・八・一	敵討巌流島	歌	嵐松次郎座	坂
〃・〃・一三	花櫻会稽掛布染	浄	豊竹此吉座	坂
四・夏	菖蒲巌流島	歌	藤川山吾座	京

《資料(六)》を見ると、巌流島の世界は、幾度となく再演されており、しかも、宝暦末から安永三、四年には、上方においての上演が集中していることがわかる。つまり、安永頃の上方での人気狂言の一つであったわけである。この頃の歌舞伎の絵尽しを見ると、初演の台帳(注⑦)とほぼ一致する。また、浄瑠璃の『花襷会稽掛布染』も、作者菅専助の特徴は多分にあるが、基本的に巌流島の世界である。以上のことから、『敵討巌流島』は、安永のこの頃には、固定した形で人々の支持を得ていた芝居であると言うことができる。

他の芝居の世界や趣向の取り入れは、この頃、当然のこととして行われていた。従って、当時、広く人々に支持されていた巌流島の世界を、半二が『道中亀山噺』に取り入れたのは納得のいくことと言える。

では、『敵討巌流島』のどのような点を『道中亀山噺』に取り入れたのであろうか。まず、類似している人物関係《資料(七)》と、二作品の人物対照《資料(八)》を次にあげる。

《資料(七)》



《資料(八)》

『道中亀山噺』	『敵討巌流島』
石井源蔵	月本武者之助・助十郎・与五郎
石井兵衛	馬淵角右衛門
岡野	お秀
お時	お梶
おくら	お捨
力松	三次郎
浜田祐軒・赤堀水右衛門	佐々木巌流

次に、『道中亀山噺』における『敵討巌流島』の影響関係を対照してあげる。

《資料(九)》

『道中亀山噺』	『敵討巌流島』
第三 源蔵が敵討の旅に出るために、わざと御前試合で祐軒に負ける。	二ツ目 与五郎は敵討の旅に出るために、吉兵衛と示し合わせて、あほう払いとなる。 四ツ目 武者之助は巌流に頼まれ、わざと御前試合に負ける。
第六 敵水右衛門と源蔵との間に立って、又四郎は死んでいく。 源蔵は又四郎への義理故、一旦水右衛門を逃がす。	三ツ目 敵巌流を父に持つお捨は、夫与五郎と父との間で苦悩する。 五ツ目 お捨は自害する。 三ツ目 与五郎はお秀らに討たせるため、一旦巌流を逃がす。
第七 祐軒は、石井兄弟にさんざん悪態をつく。	五ツ目 試合に勝った巌流は、武者之助やお秀・お梶姉妹に悪態をつく。
第八 源蔵が検使役をする中、敵討が成就する。	六ツ目 武者之助が検使役をする中、敵討が成就する。

人物関係の取り入れに伴い、右のような類似点が指摘される。

以上のことから、近松半二が『敵討巌流島』を下敷きにして『道中亀山噺』を執筆したことが明らかになった。

それでは、半二が、二つの敵討の世界を一つの作品にまとめ

上げていく目的とは何だったのだろうか。

四

人形浄瑠璃は、太夫・三味線・人形が一体となった演劇である。従って、作品を論ずるに当たっても、その初演当時の座組を無視することはできない。殊に、作者が書いた文章を直接語るのは太夫であるので、作者は太夫の芸風を考慮して各段を作っていく。そこで、『道中亀山噺』が初演された安永七年当時の竹田万治郎座の座組を考察し、座付き作者近松半二の意図を考えていくことにする。

竹田万治郎座は、安永七年から九年頃にかけて、曽根崎新地において浄瑠璃芝居を興行した座である。この座の番付・絵尽しの紋下は、

座本　竹田万治郎
太夫　竹本染太夫

となっており、また、すべての新作浄瑠璃の正本内題下には竹本染太夫の名があることから、竹田万治郎座の実質的中心人物は、染太夫であることがわかる。

この初代竹本染太夫は、宝暦四年に竹本座に初出勤して以来、着実に実力をつけてきた浄瑠璃太夫である。宝暦元年に竹本座の作者となった近松半二の作品を数多く語り、この二人は竹本座において、一方は太夫として、一方は作者として、共に成長する形をとってきた。しかし、明和四年の竹本座退転後、人形浄瑠璃の関係者は苦渋を嘗めざるを得なくなる。そして、竹本座の再興を目指す太夫・人形遣い等が、各々に座を作り、竹本座系の座が並立して存在する状況が続いた。このような座の座本に、染太夫や半二も名をあげている。

こうした状況の中、安永五年九月二十三日、竹本染太夫は、新作『塩飽七島稚陣取』で竹田万治郎座の旗揚げ興行を行った。翌六年にも『日本歌竹取物語』という新作を出すが、両作ともに、近松半二は関与していない。竹田万治郎座は、安永七年四月二十一日初日の『心中紙屋治兵衛』で以て、半二をこの座の作者として迎え入れたのである。

近松半二にとって、安永に入ってからの作者人生は不遇なものであった。安永元年から二年にかけての丸一年、京の歌舞伎の芳沢いろは座の座付き作者となっている。そして、三年から四年にかけては、操芝居の座本を勤め、五年には、菅専助の助作者として豊竹此吉座へ赴いている。当代第一の浄瑠璃作者近松半二にとっては、正に激動の数年間であったわけである。そ

の半二が旧知の染太夫に迎えられて、竹田万治郎座の作者となり、染太夫向きの作品を書くこととなった。

作者が太夫の芸風を考慮に入れて作品を書くというのは、この頃の常識である。太夫の権限の強さについては『当世芝居気質』（安永六刊）巻之一―第二の記述、

太夫もそろ〳〵見物の声がかゝる段には我場をつき作者をこまらせ。そればかりかどう云ふ意味で書こんだやら訳も差別もしらず。文句を書なほし。斯いふ文句で語らるものか節が付けらるゝ物かと。きはまってある節付るやうに。作者をへぼくたにして悪語きり。其くせふしは三味線弾に付てもらうて、我が付けた顔で語るもおかしいと作者仲間でわらひたがひに喰合そしりあふが此谷のならはせなり。

からも窺えるし、当の半二が、

声律節章構ひなく。文章計で繁昌させ。芝居再興せんすならば。本懐たらん（注⑧）

と述べたとあることからも理解できる。

では、竹田万治郎座の中心太夫、竹本染太夫は、どのような芸風であったのか。染太夫は、『音曲高名集』（文化三年序）に、

此人中興の上手にて新物面白く節を語られたり

とあり、また、『浄瑠璃大系図』にも、

此人浄瑠璃の中祖なりといふ

とあるように、浄瑠璃史上「中興の祖」と位置付けされている。

『閻の礫』（天明元年刊）には、

・御当地中興のわざもの、染丈ことにひいきさかんの利もの

ゆへ　何かなしに先巻首に居ました

・声はちいさい様でも筒ふとく　うれいもきかぬ様なれと物によつてはかんるいをながす事　此人の妙

・何といふてもこれほど場数残した人もござらぬ　どういふても竹本の礎　素人衆の守り神とは此人　今での親玉〳〵

とあり、小さな声ながら独特の節付けで人々を魅了し、巻頭に位付けされる太夫となっていたことがわかる。つまりは、「当風語り」の名人だったわけである。それ故に、新作を多く語った。旧作で語り継がれた節付けではなく、自分の新しい感性で現代に訴える、それが染太夫の一番の特徴であろう。

この染太夫のためだけに合わせて新作を書くのが半二の仕事だったわけではない。この年、染太夫以外にも注目すべき太夫がいた。三代目竹本政太夫である。天性の美声に恵まれ、『閻の礫』にも、「声大将」「お声柄が大金」と評されている。この頃の竹本座系の浄瑠璃太夫では、染太夫に次ぐ人気・実力があった。時代物の上手として名を馳せ、『仮名手本忠臣蔵』第九

・加古川本蔵最期の場は、生涯の当たり役であった。死を目前としながらも本心を隠し、故意に相手に嫌われるように振舞い、忠心を貫く人物の描写を得意としたのである。半二の作品もこの特徴を生かして書かれたものが数多くある。染太夫が当時において現代的であったのに対し、それ以前の浄瑠璃の時代物の伝統を受け継ぐ芸風を持っていたのが政太夫であった。(注⑨)

この政太夫は、安永七年四月二十一日初日『源平布引滝』『心中紙屋治兵衛』の上演の際に、染太夫を中心とする竹田万治郎座に迎え入れられた。同座がいかに政太夫に重きを置いていたかは『心中紙屋治兵衛』上「浮瀬の段」の中で、

新地の芝居で政太夫が布引一トきり聞いて往の

と、同じ時の興行『源平布引滝』を語る政太夫の宣伝を行っていることからも窺える。

染太夫と政太夫。この二人を使っての半二の作品は、安永七年の『心中紙屋治兵衛』、『道中亀山噺』、『往古曽根崎村噂』の三作である。つまり、竹田万治郎座における、この年の半二の仕事は、この二人の芸風を考慮に入れて浄瑠璃作品を書くことだったのである。

そういった観点で、今一度『道中亀山噺』を見てみることにする。そうすると、この作品が、いかに、染太夫、政太夫といった二大太夫の芸風を考慮に入れているかが見えてくる。敵討の二本柱の一人、石井兵助は、天神祭といった観客たちの記憶に新しい風物を背景に、当時における現代青年として描かれていた。この兵助が、最も活躍する段は、第四「刀屋の段」であり、この切を語ったのは、当風語りの名人、竹本染太夫なのである。つまり、兵助という人物は、染太夫の芸風から生み出されたことがわかる。一方、もう一人の柱である石井源蔵は、自分の本心をあくまで表面に出さず、目的のためには全てを犠牲にしようとする時代物の典型的な人物である。このような人物の登場する場は、竹本政太夫の得意場であった。そして、この作品でも、源蔵が最も活躍する第六「在所の段」を政太夫が語っている。以上のように見てくると、染太夫と政太夫といった二人の浄瑠璃太夫の芸風から、兵助と源蔵といった敵討の二本柱を生み出した、近松半二の姿勢が明らかになった。

半二自身が、自分の文章だけで作品を作り上げたいと望んでも、太夫の芸風を考慮に入れることなしに、作品を書くことができなかったのは、見てきた通りである。この『道中亀山噺』が、亀山敵討の世界と厳流島の世界といった異なる世界を一つにまとめる目的は、芸風を意にした二人の太夫を生かした芝居作りであった。染太夫には、亀山敵討の世界を、政太夫には、

厳流島の世界を語らせたのである。

このように見てくると、『道中亀山噺』は、先行する亀山敵討物の延長上でのみ成立した作品でないことが明らかになった。亀山敵討物の世界とは全く別の厳流島の世界をも取り入れて成立した作品なのである。そして、作者の近松半二が二つの世界を一つの作品に仕上げていく根底にあるものは、その座が抱える人気太夫の芸風を生かすことであった。人形浄瑠璃の衰退期においては、座の興行も不安定で、座組の良し悪しが、興行の存続の決め手になるわけであるから、その座の太夫の芸風を考慮に入れることなしに、作者が新作を書くとは考えられない。座組を考慮に入れ、作者の手腕を探っていくことが、この時期に活躍した浄瑠璃作家を研究する上で必要不可欠なことであろう。

（注①）（注②）別番付・正本・絵尽しでは①（口）文字太夫・（奥）男徳斎②の太夫・葉太夫、となっているので、実際の上演は、別番付等の方であろうが、作者が演者を考慮に入れて作品を書いたという観点に立つと、太夫の変更がある以前の番付を資料にするのが妥当だと考えた。

（注③）『古今俄選』（安永四年刊）に、「安永」としてこの俄を載せる。

（注④）『雛波丸綱目』（安永六年刊）の「御座鋪人形」の部にその名が見える。

（注⑤）『元禄曽我物語』の兵助に当たる源之丞が養子である点、敵討を成し遂げるのが弟たちではなく、子供たちである点（つまり、親子三代の敵討）等、若干の相違があるが、後にあげる亀山敵討物の特徴を全て有していることは同じである。

（注⑥）以下、人物名は『元禄曽我物語』で代表させる。

（注⑦）初演台帳の写しである愛知県立大学付属図書館蔵の台帳（『歌舞伎台帳集成』第三巻所収）を底本としたが、この台帳は、敵討成就の切場が欠けているので、底本と同じく初演台帳の写しと思われる東京大学国語研究室本で切場（『歌舞伎台帳集成』第三巻に資料として所収）を補った。（以上、『歌舞伎台帳集成』解題による。）

（注⑧）福松藤助著『浪華日記行』の安永九年十月廿六日の条に、半二の言葉として記している。

（注⑨）以上、初代竹本染太夫、三代目竹本染太夫については、『義太夫年表』から年譜を作成し、その語り場を読むことで、特徴を考えた。

（本学大学院博士後期課程）